ロロメータの冒険者たち
ライカンスロープとケーキ屋

おいがつお

I

ぼくとミナカミの座ったテーブルには、おそろしく長い沈黙が訪れていた。
正確に言うと、さっきからミナカミが「あー……」だの「えー……」だの「そのな……」だの、しばしばうめき声をもらしているので、完全な沈黙は訪れていない。
「……」
ぼくはコップの水を一口。これで、初めはいっぱいにあった水の、半分を飲み終えてしまった。
「ラーク……その……」
ミナカミの視線が泳ぎまくっている。視線どころか、一目でワーウルフとわかる、彼のオオカミの顔も、ぎこちなく上を向いたり、下を向いたり。
「あのだな……」
歯切れ悪く、またミナカミの口が閉じる。
「そう……」
むむむ、じれったい。
けれど、せかすようなことは言わないでおく。彼自身のタイミングというものがあるのだろう。
ミナカミは、ギュウと目をつむった。眉間(みけん)にしわが寄り、ググ、とのどが鳴る。
相談事があるとミナカミに持ちかけられたが、どうもよっぽど話しづらいことをしゃべるつもりらしい。
「……よし！」
やっとこさ心の準備ができたのか、ミナカミの口が重々しく開かれた。
「ラーク、俺の話を聞いてくれ」
「はい、なんでしょう」
「……その、だな……あー……」
またか。
と思ったが、
「す……すき、好きな人がな……そう、好きな人がいるのだ」
今度はちゃんと本題が飛び出てきた。

と、ここらで自己紹介を。
ぼくの名前はラーク。〈はるかぜ亭〉ではたらく冒険者である。
冒険者とは、簡単に言うならば何でも屋だ。パーティを組んで、モンスター退治や行商人の護衛のような、い

ろいろな依頼を受けて生活している。
冒険者としての職業、クラスはレンジャー。なんとも説明しづらいが、自然環境での活動に慣れた軽戦士くらいに思ってくれればいい。
そして、しぼるように声を出していたのが、ぼくの前にいるミナカミだ。

ぼくと同じく、冒険者向けの依頼を斡旋(あっせん)してくれる冒険者の店〈はるかぜ亭〉を拠点とする、冒険者の一人である。
種族は、人間であるぼくとは異なり、ワーウルフ。獣人――ライカンスロープの一種であり、耳としっぽにのみ獣の特徴が見られる者もいれば、頭部や体の一部、もしくは全身が毛皮に覆われた者もいる。
ミナカミは、白みがかった力強い灰色をした毛並みを持つ、二足のオオカミのような姿をしたタイプだ。
それから、彼が肌身離さず腰に差しているのが、一振りの刀。彼の職業、サムライのトレードマークである。
「へえ、好きな人ができたんだ」
ミナカミは、現在ぼくを招いた理由を、ようやく語り始めたところであった。
「そうだ」
神妙(しんみょう)にうなずくミナカミ。

ぼくは次の言葉を待つ。
「……」
「……」
また沈黙がこんにちはしてきた。
「えーっと……それで？」
「う……うむ」
さすがにこっちから質問しないと、ラチが明かない。
ぼくは少しミナカミをつつくことにした。
「それを言うためだけに、こんなに時間かかったわけじゃないでしょ」
ふと柱時計を見てみると、ミナカミと二人で座ってから、だいたい五分くらいは経過していた。
「そう、そうなのだ」
ミナカミが、コップの水をガバッと口に入れた。
「……ラークよ、俺はどうすればいいんだ？」
ど、どうすればって……。
「そんなあいまいに言われても困るよ。もうちょっと、具体的な情報はないの？」
「具体的、とは？」
「そうだなあ……とりあえず、お相手はどんな人？」
ぼくがそういうと、ミナカミは押し黙ってしまった。
彼の耳が赤くなる。
「……またぼくを五分近く待たせる気なの」
「ま、待った！　言うって！」

そう言ったはいいものの、またミナカミの視線が泳ぎ始める。
「……」
まさか「好きな人がいる」の一言を言うためだけに、五分もかけるヤツがいるなんて思わなかった。
「うー……」
日なたに放っておかれて、乾燥しかけたサンショウウオのような声を上げるミナカミだが、前回と比べるとぼくの質問には手早く答えてくれた。
「あ、あれだ……ラークも知っている方だ」
それなら話が早い。
「だれ？」
「……その……あの人だ……」
「いや……だからだれよ」
「そう……あの……あれ……」
しどろもどろのミナカミに、ぼくはうろんな目つきを送る。
このくらいはしたっていいだろう。
「待ってくれ、心の準備をさせてくれ……」
「はいはい」
すぅ、とミナカミは深呼吸。
「いいか、言うぞ」
「ん」
「その人の名前はな……あー……エ、エイプリル殿だ」
「ああ、エイプリルか」
エイプリル。彼女はここ〈はるかぜ亭〉の看板娘だ。エイプリルもミナカミと同じく、ライカンスロープである。ただ、少し細かく分けると、ネコの姿をしたワーキャットと呼ばれるのが彼女の種族である。
「言われてみれば、納得できるな」
思い返せば、エイプリルと話しているときのミナカミは、みょうに楽しそうではあった。
「それで、何とか仲良くなりたいと」
「そういうことだ」
きまじめな顔のミナカミ。
「聞いておきたいんだけど、ミナカミはこのことを他の人に……パーティメンバーとかには、相談したことある？」
「いや、ない。ラークが初めてだ」
所属している店こそ同じだが、ぼくとミナカミは、別に同じパーティのメンバーというわけではない。だが、年齢がいっしょ、かつ男同士ということで、ミナカミはかなり馬が合う相手なのだ。
「同年代の者の意見を聞きたくてな」
ミナカミは、もうちょびっとしか中身のないコップをかたむける。
「どうだ、ラーク？」
「……うーん、ことわっておくと、ぼく、恋愛経験ない

よ？」
　ぼくは好きな女の子ができたこともなければ、まして告白されたこともない。
「そんな人からの話でよければ、何か言うけれど」
「それでかまわん。少なくとも、俺よりはラークの方が、その手の知識はあるはずだ」
　そんなに期待されても困るんだけど……。
　しかし、そこまで言われたら仕方がない。ぼくなりの意見をのべるとしよう。
「そうだなあ。まずはご飯にさそうとかが、丸くていいんじゃないかなあ」
「なるほど、食事にか」
　ミナカミはいたって真剣な表情で聞いている。
「休憩時間とか、見計らってさ」
「ふむふむ」
　うなずくミナカミ。
「どこにさそえばいいだろうか」
「どこ、かあ」
　ぼくはうでを組んだ。
「どこでも大丈夫だとは思うけど……」
　こう言ったぼくだったが、その時ふっと思い出したことがあった。
「あ、そうだ」
「なんだ、何かあるのか？」
　ミナカミの期待するような眼差し。
「ちょっと前にマレアが話していたんだけど、エイプリルと二人で〈玉扇堂（ぎょくせんどう）〉に行ったんだって」
　瞳に特別な力を持った、シェイプアイという種族のマレアは、ぼくと同じパーティの魔法使（ウィザード）いである。
「〈玉扇堂〉か。まだ行ったことがないな」
「えぇ、もったいない。あそこのケーキうまいのに」
　〈玉扇堂〉はケーキ屋兼喫茶店である。お値段は安いとは言えないものの、ケーキ専門店を名乗っているだけのたしかな味で、町の人たちにはちょっとしたぜいたく感のある人気のお店として知られている。
「いい機会じゃないか。エイプリルをさそって〈玉扇堂〉に行って来たらどう？」
　ぼくはこう提案した。
「彼女、甘いもの好きらしいし。きっとオッケーしてくれるよ」
「なるほど！」
　ミナカミはぼくの手をにぎり、ブンブンと振る。ついでにしっぽも振る。
　とはいえ、少々気にかかることがあった。
「喜んでるとこ悪いんだけどさ。ミナカミ、ちゃんとエイプリルをおさそいできるの？」

「……」
ミナカミは無言で頭を抱えた。
やっぱりな。
さっきの反応からして、そんな気はしていた。
「……五分も待たせたらダメだよ」
「わ……わかった」
なんかミナカミの様子を見ていると、こっちが心配になってくる。
「まあ、とにかくがんばれ」
「うむ」
すでに緊張してるみたいだけど、大丈夫か？
「……とにかく、やってみよう。やってみねば始まらん」
だが、ミナカミの固い意思表明。
本人もそれなりの覚悟が決まったようだ。
「その意気だ」
ぼくがはげましの言葉を送ると、ミナカミは姿勢を正した。
「ラーク、ありがとう。お前に相談してよかった」
「どういたしまして。なんか、ありきたりなアドバイスしかできなかったけど」
「とんでもない。俺には思いつきもしなかった」
「そ、そう？」
気になる子を食事にさそうってのは、よくある手だと思ってたんだけど……。
本人がありがたいって言ってるならいいか。
「そうだ、言い忘れていた」
ミナカミの目つきがけわしくなった。
「もしも、だ。このことを他の者に話したら、お前をたたっ斬るからな。たとえラークが無二の友であろうが斬る。いいな、たのむぞ！」
「わかってるよ」
ぼくは苦笑いしながら答える。
相談したのはぼくが初めてって言っていたし、他の人には知られたくないんだろうな。
がんばれ、ミナカミ。

Ⅱ

ぼくたちはロロメータの町を歩いていた。人数は五人だ。
まずはぼく。それからミナカミ。あとはマレアにシャミィ、エイプリル。
「ねえ、ミナカミ。なんでぼくらもいるの」

横に並んだミナカミに、ぼくはこっそり話しかける。
「……」
しょんぼりしているミナカミ。やりきれない気持ちがしっぽに見え隠れしている。
エイプリルと「二人」で〈玉扇堂〉に行くんじゃなかったのか……？
「エイプリルがいるってことは、さそうこと自体はできたんだよね？」
「うむ」
ミナカミが答える。
「じゃあ、なんでぼくとかマレアとかがいるの？」
ぼくの質問に対して、ミナカミは丁寧に説明してくれた。
昨日のことだ。
ぼくからのアドバイスを受けた次の日、ミナカミはさっそくエイプリルのもとに向かったそうだ。
朝の静かな時間、エイプリルは一人でのんびり紅茶を飲んでいた（彼女がよく、こういう朝の過ごし方をすることは、以前に聞いたことがあるらしい）。
周りに人がいないこの時間が、一番のチャンスである。
ミナカミは意を決して、エイプリルにデートのおさそいをしたそうだ。
ガッチガチに緊張していたミナカミであったが、驚くほどあっさりと〈玉扇堂〉に行くことを、エイプリルは受け入れてくれた。
「よかったじゃん」
「そう、ここまではよかったのだ……」
エイプリルの返答を聞き、舞い上がりそうになるのをこらえていたミナカミは、後方の階段から下りてくる、パーティメンバーの姿に全く気がついていなかったのである。
「ミナカミ！」
名前を呼ばれてミナカミは振り返った。
パタパタと受付にやってきたのは、身長1メートルあるかないかの少女。
緑色のスカーフを巻き、腰には長さのちがう二本の短剣。
「シャミィか、おはよう」
盗賊（シーフ）の彼女はメルピグミー、いわゆる小人族のシャミイだ。ミナカミのパーティの一員であり、彼の妹分でもある。
「〈玉扇堂〉行くの？」
「ああ、そうだ」
ミナカミはシャミィにそう言った。
だが、今回に限っては適当にごまかしておくべきだったのだ。
「するとな……シャミィが、わたしも行きたいって言い

だしてな……」
　かわいい妹分のお願いを、無下に断ることもできない。第一、もし断るとしたらその理由を言わねばならない。
「それで、シャミィもついてくることになったのだ」
「なるほどねぇ……」
　まあ、ぼくもミナカミの立場だったら同じような結果になっていただろうし、何も言えない。
「エイプリルはいいって言ったの？」
「うむ、シャミィもいっしょでいいよと、な」
　その後、会話の流れでぼくとマレアもさそうことになったそうだ。
「で、今に至ると」
　ミナカミは再度うなずく。そのしっぽは力なく垂れていた。
　悲しい。
「あー……また次があるさ」
　ぽんぽん、とぼくはミナカミの背中をたたく。
「……俺がエイプリル殿をさそうのに、いったいどれだけの精神をすり減らしたと思っているのだ」
　ミナカミの目は半分死んでいた。

　大通りから少し外れた位置にある〈玉扇堂〉は、レンガ造りのこじんまりとした雰囲気の建物である。
　〈玉扇堂〉と文字のある木製の板をかかげた、コック帽をかぶったウサギの看板が目印だ。
　先頭で店のドアを開けたのはマレア。カラン、という気持ちの良いベルの音が鳴る。
「いらっしゃいませ」
　こちらに気づいた店員さん（マレアいわく、彼はマカンという名前らしい）が、カウンターから声をかけてきた。
「五人よ。ここで食べてくわ」
　この中で一番〈玉扇堂〉に足を運んでいるのはマレアだ。もはや行きつけの食堂感覚で、マレアはパーにした右手を差し出した。
「かしこまりました。今日は大人数ですね」
「そうなのよ」
　マカンさんはマレアに話しかける。
「ここ来るの初めての人もいるし」
　ミナカミを手で指し示すマレア。ミナカミは軽く一礼する。軽くといっても、わりあいしっかりしたおじぎである。
「これはどうも」
　店員さんもつられておじぎ。
「それでは、こちらからお選びください」
　カウンターには、メニューの書かれた紙が敷かれてあ

る。
　ズラリと並ぶのは、多分ケーキの名前だ。
　ミゼラブル、タルトタタン、シャルロット……。
　ダメだ。田舎暮らしの長かったぼくには、あまりに見慣れぬ名前がそこかしこにある（シャルロットなんて人名じゃないのか？）。
　久々に来たけれど、やっぱり〈玉扇堂〉のケーキの名称は小難しい。
　カウンター近くのメニューボードをながめているミナカミとシャミィも、ぼくと同じような感想を抱いたらしい。
「シャミィ、これはなんだ？」
「わかんない。エイプリルはわかる？」
　シャミィがエイプリルを見上げた。
「私もそこまでくわしくないけど……」
　エイプリルが二人に教えつつ、向こうは三人でボードを見ている。こっちも決めるとしよう。
　……うーん。なんか、ショートケーキとか、レアチーズケーキとか、そういう名前を見るとみょうにホッとしてしまう感覚があったりする。
　なぜって、文字を見ただけでどんな感じのケーキか想像できるじゃないか。
　でも、せっかくだから、ふだんは見かけないものを食べてみたい。

「マレアは、このまえ来たときは何を頼んだの？」
　ぼくはマレアにたずねた。もちはもち屋である。
「んーとね」
　人差し指を動かすマレア。
「これ」
「えーっと……シャルロット？」
「そうそれ」
「人の名前かと思ったヤツだ」
　名前の下には、少し小さめの字で、これがどんなものなのかが書かれている。
「フルーツを使ったケーキなのか」
「おいしかったのよー」
　マレアはぼくらのパーティメンバー内では、一番舌が肥えている。そんな彼女が言うのなら、味にまちがいはないだろう。
「じゃあぼくは、このシャルロットにしよう」
「はーい。わたしは、そうね……」
　他の四人が何にするか考えている間に、ぼくは何気なく店内を見渡す。
　席についている客はいない。テーブルは三個、あとカウンター席がいくらか。広さとしては、〈はるかぜ亭〉の半分くらいの大きさだ。そして流れる空気も、冒険者の店のそれとは全然ちがう。
「私も決まりました」

エイプリルを最後に、全員何をたのむかが決まったようだ。一人ずつ注文をしていく。
「じゃ、席で待っていましょ」
マレアがぼくたちを、少し奥の方にあるテーブルへと連れていった。
テーブルは長方形だ。ぼくは、ミナカミをエイプリルのとなりに座らせた（多分、さりげなくうながした……と思う）。
「そういえばミナカミとシャミィ、何か依頼受けてきたんだっけ？」
一息ついたマレアが、二人に話しかけた。
「ああ、このまえのイモムシ退治の依頼か」
ミナカミたちのパーティは、畑を荒らす巨大なイモムシのようなモンスターの退治を引き受けていた。
「どうだった？」
「バッチリ！」
「うむ。しっかり終えてきたぞ」
シャミィがVサインを作り、ミナカミも相づちを打つ。
「相手はやっぱり、ジャイアントウォームだったの？」
「ああ。しかも大変だったのは、ヤツの掘った穴が、ファイアントの巣穴につながってたことだな」
丸い口にグルリと鋭い歯の生えた、大きなイモムシのような姿をしたモンスターが、ジャイアントウォーム。
タフネスがあるので、めんどうな相手である。

そして、口から火の玉を発射することができる赤色の大型のアリが、ファイアントというモンスターだ。
「ウォームが作った穴から、ファイアントの群れがわらわら出てきてな。もう乱戦だ」
「ウォームも強かったね。ミナカミ、攻撃くらって、ふきとんじゃったんだもん」
シャミィが言った。
「でもかっこよかったよー、ミナカミ。こう、バサバサアリたちをなぎ倒してさ」
「シャミィもがんばってたな。えらいぞ」
ミナカミとシャミィは、ずいぶんな長い付き合いになるらしい。ミナカミはシャミィのことを妹分と言ってはばからず、シャミィもミナカミのことをお兄ちゃんのようだと慕（した）っている。
種族こそちがえど、じっさい、こうして見ると兄妹みたいだ。
ぼくは一人っ子なので、少しばかりうらやましく思う。
「お待たせしました」
と、店員さんがトレイを持ってやってきた。
ぼくは自分の前に置かれたケーキを見つめる。
「これがシャルロット」
いちごだ。それとブルーベリー。ケーキの上部にはこれらがまんべんなくもられていた。

それを囲うようにあるのは、多分サクサクする感じの食感の……ビスケットみたいな生地だ。
さて、とフォークで縦にケーキを切り、一口。
うまい。ビスケット生地もクリームも、上に乗った果物も、みんなうまい。舌にしつこく残らない甘さがいい。
ケーキなんてそんなに食べることのない代物だが、これはおいしいとぼくにもわかる。
そしてコーヒーをすする。これがまたうまい。コーヒーと甘いお菓子というのは、どうしてこんなに相性がいいのだろう。
ミナカミたちの冒険の話を聞きながら、ぼくはケーキにフォークを刺しこむ。
「あの大きなジャイアントウォーム、平均よりも成長した個体だってジーナが言ってて……」
「その時ノズが俺を回復してくれてな……」
冒険の話をもっと聞きたいというエイプリル相手に、シャミィとミナカミが答えていた。
二人で来ていたら、あいつがこんなハキハキとエイプリルと話せていたかどうかわからない。
これはこれで、今回のお出かけは成功と言えるのではなかろうか。
他人事（ひとごと）ながら、ぼくは心の中でホッとため息をついた。
それはそれとして、こういう冒険家業の話は、冒険者の店でこそお似合いだ、優雅な喫茶店では、もっと他の話をしてもいいんじゃないか。そう思うのは、ぼくだけだったんだろうか。
楽しいから全然問題ないのだけれど。

Ⅲ

夜。
ロロメータにある唯一の冒険者の店〈はるかぜ亭〉の受付にある棚（たな）には、いくらかの書類が並んでいる。
これらは〈はるかぜ亭〉に持ちこまれた、冒険者宛（あ）ての依頼の書類だ。
それを整理しているのは、〈はるかぜ亭〉の看板娘、ワーキャットのエイプリル。
彼女は机に残っていた残りの書類を棚にしまい、コップに水を汲んだ。コップは二つ分である。
それを、自分に向かって手を振るシェイプアイ、マレ

アの待つテーブルへと持っていった。
「お仕事終わった？」
「うん」
イスを引き、腰かけたエイプリル。もじもじときまりが悪そうに、指を遊ばせる。
「マレア……今日どうだったかな？」
「どうだったって、どういうことよ」
マレアがフライドポテトをつまんだ。エイプリルのおごりなので、えんりょなく食べることにする。
「ミナカミとうまくやれたかってこと？」
「まあ……そんな感じ」
歯切れの悪いエイプリル。
「別に問題なかったと思うわよ」
マレアはポテトをつまむ手を休めない。
「第一、今回の〈玉扇堂〉にしたって、ミナカミの方からさそってきたんでしょ？　エイプリルのこと悪く思ってたなら、そんなことしないって」
そこまで友人のお悩みに対して心配をしていないマレアは、気楽にもしゃもしゃとポテトをほおばる。
「というか、もっとガンガンいっても大丈夫じゃない？」
「それができたら苦労しないわ……」
頭を抱えるエイプリル。
「気になる人がいる」とエイプリルから相談されたのは、つい最近のことである。

相手はミナカミ。ラークと仲のいい、サムライのワーウルフだ。
彼はきまじめなところがあるが、疑いようのないほどの善人である。マレアはエイプリルのことを応援するつもりでいた。
そこへ、〈玉扇堂〉へのお出かけだ。
五人で行くことにはなっていたが、さりげなく二人をとなりの席に座らせることぐらいはしてあげた。
しっかり会話に花を咲かせていたので、とりあえずは上々と言える、だろう。
そこに関しては、シャミィの功績も大きかったように思う。結果オーライだ。
「ま、ガンガンいかないなら、ゆっくりやっていきましょ。ミナカミたちのパーティも〈はるかぜ亭〉を離れる気はなさそうだし、時間はたっぷりあるわ」
「そうね。ありがとう、マレア」
「いいえー」
エイプリルがこんな話をした相手は、今のところマレア一人である。
多分、カタツムリのようなスピードでこの二人の関係は進んでいくんだろうな。
マレアはなんとなくそう感じていた。